

55 顔画像刺激に対する自閉スペクトラム症者の視線行動

福井隆雄¹, 金樹英², 東江浩美², 鈴木繭子², 西牧謙吾², 中島八十一¹, 和田真¹

1 研究所 脳機能系障害研究部 2 病院 第三診療部

【はじめに】

自閉スペクトラム症(Autistic Spectrum disorder: ASD)者は日常場面で「目が合わない」と指摘されるように、社会的コミュニケーションの障害として強調されることが多く、実際、顔写真を用いた視線行動分析において、定型発達者に比べて、目を見る割合が低く(e.g., [1], [2], [3]), 他者の注意の所在を理解し共有する能力である共同注意などの社会的注意の障害も報告されている(e.g., [4]). 本研究では、コミュニケーション改善の訓練プログラム開発の端緒として、「顔画像の目を見て、その視線手がかり(つまり、共同注意を働かせること)により、実行がスムーズに行える」課題を行い、定型発達者、ASD群の両者で比較検討した。

【方法】

ASD者10名(女性1名, 16-23歳, 平均年齢 18.7 ± 2.1 歳)と年齢を統制した定型発達者(女性1名, 16-24歳, 平均年齢 20.4 ± 2.5 歳)が実験に参加した。課題は、ノートパソコンのディスプレイ上に、上下左右に移動しながら、1秒間ずつ提示される顔刺激の追跡であった。顔刺激は、真正面を向いているもの(視線手がかりなし)と、次に提示される位置の方に視線をむけているもの(視線手がかりあり)の2種類が用いられた。参加者は、実験開始前に、自閉傾向を測定する質問紙「自閉症スペクトラム指数(AQスコア)」[5]への回答を求められた。顔刺激提示時間(1秒間)の各時点(0.05秒ごと)における平均目領域停留時間について、2要因(参加者間要因:参加者グループ, 参加者内要因:視線手がかり)の分散分析を行った。

【結果】

グループの主効果は、刺激提示0.45~1秒後に認められ($p < .019$), ASD群では、目領域停留時間がTD群に比べて短かった。その一方で、視線手がかりの主効果が、刺激提示0.05~0.6秒後に認められ($p < .027$), ASD者はTD同様に、視線手がかりあり条件の方がなし条件に比べて、有意に目領域停留時間が長かった。刺激提示後0.25~0.4秒間における、視線手がかりあり条件の目領域停留時間とAQスコアの下位尺度「想像力(の困難)」との間に有意な関連が認められた。

【考察】

ASD者は、心理的な負荷が小さいと考えられる、線画の顔刺激においても目領域を見ないことが示された一方で、視線手がかりは定型発達者と同程度に利用できることが明らかになった。さらに、視線手がかりによる予期的な視線移動について、AQスコアの下位尺度「想像力(の困難)」により予測されうる可能性が見出された。

【参考文献】 [1] Klin et al. (2002) *The American Journal of Psychiatry*, 159, 895-908. [2] Pelphrey et al. (2002) *J Autism Dev Disord*, 32, 249-261. [3] Phillips et al. (1992) *Development and Psychopathology*, 4, 375-383. [4] Dawson et al. (2004) *Developmental Psychology*, 40, 271-283. [5] 若林ら (2004) *心理学研究*, 75, 68-84.